

# 現代の ことば

かわせ  
川瀬  
いっし  
慈

路上に影が浮かび上がる。人の形をしてはいるものの、それは闇のようなかたまりで、どこまでも奥深い異界への入り口なのかもしれない。黒いニット帽に黒い厚手の衣服。ひっそりとした大きな袋もやはり黒。道端のゴミを袋に引き集めながら、タスファイ老人がふらふらと歩いてこちらにやってくる。

すると、時間が止まったようになる。路上の喧騒の中に突如現れた漆黒の老人。奇抜な風貌とは対照的な紳士的な物の腰。そのたまたまめ、顔気に、皆は凛然と敬意を払い、街のやんちゃな悪ガキたちですら嘲笑したり、イタスラを任掛けようとしめない。

老人は、私をみつめて立ち止まり、煤だらけの顔をゆがめて笑う。キョロリとした大きな目だ。現地の形式的な挨拶

## 約束の地



挨拶を交えたあと、タスファイは堰をきったように話します。若いころ英語の教師をしていた時のこと、亡くした妻のこと、そして「約束の地」で生活していたこと。時の矢はどこかに置いてきたまま、影からの使者のような老賢人の話は途切れることなく延々と続く。

邪視を持つ集団。ベタ・イスラエルの人たちは、そう呼ばれてきた。ベタ・イスラエルとは、エチオピアに住むユダヤ教徒のことだ。タスファイ老人もまた、エチオピア北部のベタ・イスラエルとして生まれたそうだ。北部の都市ゴンダールやその郊外にはかつて、当集団の集落が数多く存在していた。ゴンダール王朝時代、ベタ・イスラエルは鹽づくり等の職能集団として、為政者たちに重宝がられる一方、キリスト教エチオピア正教会の影響が大きな地域社会における異端者の集団として差別的な言説を付与されてきた。ベタ・イスラエルは夜にハイエナに変身する。その邪視に射抜かれた者や親族は死ぬ、あるいは病気になる。こうした奇妙な風説の裏には

は、当集団に対する人々の恐怖、畏怖、侮辱等々、様々な感情が見え隠れする。1980年代と90年代初頭、イスラエルの帰還法に基づいてくつかの「救出」作戦の下、ベタ・イスラエルの大多数がエチオピアからイスラエルに移住した。しかしながら、太古より独自の教義を實踐してきたエチオピア系のユダヤ教徒に対するイスラエル国内での社会的な差別は根強く、当集団の苦難の旅に終符が打たれたわけではない。タスファイ老人もまた、イスラエルによる作戦の下、一度はイスラエルに移住した。しかし

棄て、路上で暮らすようになったのだという。毎夕、18時ちょうどになると、彼はゴンダールの路上で夕空を仰ぎ見、そのまま石化したかのように固まって動かなくなってしまう。街の中心で、黒くめの異形の老人の儀式がはじまるのである。街の人々にも私にも、それが何か特別な対象への祈りなのか、あるいはそうではないのか、あるいはそうではないのか、あるいは、皆がわかっていないのは、明日もタスファイ老人がふらふらと同じ場所へやってきて、同じ儀式を繰り返すということだけである。

(国立民族学博物館助教、映像人類学・アフリカ研究)